様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１８Ｋ１７５６４

研究課題名（和文）小児科外来における保護者の感染予防に関する認識と行動の実態と看護支援方法の構築

研究課題名（英文）Parents' Awareness and Behavior with Respect to Infection Prevention in the Pediatric Outpatient Clinic and Constructing Methods for Nursing Support

研究代表者
吉川　寛美（YOSHIKAWA, Hiromi）

名古屋市立大学・大学院看護学研究科・講師

研究者番号：４０７７８１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、小児科外来受診時に小児が適切な感染予防行動を行うために必要な支援を明らかにすることである。1年以内に未就学児の小児科受診に付き添った保護者を対象にインターネット調査を行った。回答者数は400名であった。外来受診時の小児の行動での感染の危険性について、認識していない保護者が40%程度いた。保護者の意識を高めることで、小児の行動が改善される可能性が示唆された。一方で、小児に感染予防行動を行わせることについて、31%の保護者が「できていない」と回答した。保護者の認識が小児の感染予防行動につながらない原因を追究していく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　小児は免疫機能が未熟なため多くの感染症に対し感受性が高く、感染症に罹患しやすい。医療施設の外来部門は、様々な理由で受診をした多数の患者が混在するため交差感染のリスクが高く、感染予防対策は重要である。本研究では、小児科外来受診時の小児の行動による感染の危険性を認識していない保護者の存在から、保護者の認識を高めることで小児の行動が改善されることが示唆され、また病院から出る時の手指衛生の実施に改善の余地のあることが明らかとなった。このことは小児科外来での感染予防対策の改善とともに、小児とその家族の健康にとって意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the support that is needed for children to adopt appropriate infection prevention behaviors during pediatric outpatient visits was investigated. The participants in an online survey were parents who had accompanied preschool-aged children on a visit to a pediatric clinic within the past year. Responses were received from 400 parents. Approximately 40% of parents were not aware of the risks of infection due to children's behavior during outpatient visits. This suggests that it may be possible to improve children's behavior by raising parents' awareness. Conversely, with regard to getting children to behave in ways that will prevent infections, 31% of parents responded that they wanted to make their children follow these behaviors but were unable to do so. Therefore, it will be necessary to investigate the reasons why parents' awareness does not lead to children's adoption of preventive behaviors.

研究分野：感染予防看護学

キーワード：感染予防　小児　病院外来

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

小児はその成長発達段階から、免疫能が弱く感染防御機能が未熟であり、感染症に罹患しやすい。さらに身体的・生理学的特徴から重症化しやすく、小児の感染予防対策は重要である。保育所や小児科の玩具等の共有物品や環境は、病原性微生物に汚染されており、それらを介した感染拡大の報告もあることから、適切な衛生管理が必要である。

病院外来は、様々な理由で受診をした患者が同じ空間で過ごすため、交差感染のリスクが高い部門であり、さらに小児科は様々な疾患の小児が受診をする科である。本研究に先行して行った小児科外来における玩具の適切な管理に向けた研究の中で、保護者ごとに感染予防に関わる認識が異なり、小児の共有物品や環境との接触、衛生行動に影響をしていることが考えられた。共有物品や環境は不適切な使用により容易に汚染されるため、医療従事者による適切な衛生管理だけでなく、使用する小児および保護者による適切な使用や衛生行動も必要である。小児科外来受診時の感染予防に関わる保護者の認識や小児の行動を明らかにした研究はほとんどなく、これらを明らかにすることで、必要な看護支援方法を検討することは、保護者の適切な衛生認識と行動のための看護支援につながり、衛生管理の質の向上に寄与できると考えた。

２．研究の目的

小児科外来における医療関連感染予防に寄与することを最終目的にとし、保護者の感染予防に関わる認識と小児行動の実態を明らかにすることで、小児が適切な行動や感染予防行動を行うために必要な支援について検討することを目的とする。

３．研究の方法

（1）調査対象者

東海３県（愛知、三重、岐阜）に在住し、１年以内に未就学児の小児科受診に付き添いをした保護者を対象とした。インターネット調査会社の登録者へスクリーニング調査を行い、上記対象条件に合う方へ、回答を依頼した。

（2）調査期間

2022 年 12 月（回収数 400 を超えた時点で終了）

（3）分析方法

SPSS（ver29）を用いて記述統計を行った．外来受診時の小児の行動について、小児の発達段階ごとに Fisher Exact test または Fisher-Freeman-Halton test を行った。保護者の認識と小児の行動について、Fisher Exact test を行った。有意水準は 5%未満とした。

（4）倫理的配慮

調査対象者へは、インターネットの画面上にて文書で研究の主旨、匿名で行い個人を識別できる情報は扱わないこと、同意後に撤回が可能であることを説明し、同意の入力を得た方を対象とした。名古屋市立大学大学院看護学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：22023）

４．研究成果

（1）保護者および小児の属性

分析対象者は 400 名であり、女性 296 名（74.0%）、男性 103 名（25.8%）、その他１名（0.3%）であった。保護者の年齢は、30～40 歳が最も多く 259 名（64.8%）、次に 40～50 歳が 94 名（23.5%）、20～30 歳が（23.5%）であった。保護者に付き添われて受診をしていた小児は、男児 201 名（50.3%）、女児 199 名（49.8%）であった。小児の年齢は、0 歳 72 名（18.0%）、1～3 歳 122 名（30.5%）、3 歳以上 206 名（51.5%）であった。受診の目的は「予防接種」が最も多く 203 名（50.8%）であり、次に「一般診療（体調不良等）」が多く 195 名（48.8%）、「乳児検診（健康診査）」が 39 名（9.8%）であった。小児科の形態は「診療所・クリニック」が 364 名（91.0%）、総合病院の小児科が 36 名（9%）であった。

（2）小児科外来受診時の感染予防についての保護者の認識および、小児科外来受診時の小児の行動による感染の危険性の認識（図１）

小児科外来受診時の感染予防について、「重要」または「やや重要」と回答した保護者は 343 名（85.8%）であった。「どちらでもない」、「あまり重要ではない」、「重要ではない」と回答した保護者は 57 名（14.3%）であった。

小児科外来受診時の小児の行動による感染の危険性について、「危険がある」または「やや危険がある」と回答した保護者が多かった行動は、「待合室で症状のある患者と距離を空けない」334 名(83.5%)、「病院内の環境や物品に触れた後に手指衛生をしない」286 名(71.5%)、「病院から出る時に手指衛生をしない」280 名（70.0%）であった。各行動でほぼ 60%以上の保護者が、危険性を認識していた。一方で「どちらでもない」または「危険はない」、「あまり危険はない」と回答した保護者もいた。「危険がある」または「やや危険がある」と回答

した保護者が最も少なかった行動は、「受診の目的にあわせ適切な時間に受診をしない」181名（45.3%）であり、適切な時間に受診をしないことでの感染の危険性を認識していない保護者が多かった。

小児科外来受診時に感染予防の重要性を認識していない保護者が 14.3%いること、小児のどのような行動で感染の危険性があるかを認識していない保護者が各行動で 40%程度いることが明らかとなった。小児が適切な感染予防行動を行うためには保護者による支援が必要であり、保護者の認識を改善することでより良い小児の行動に影響すると推測された。

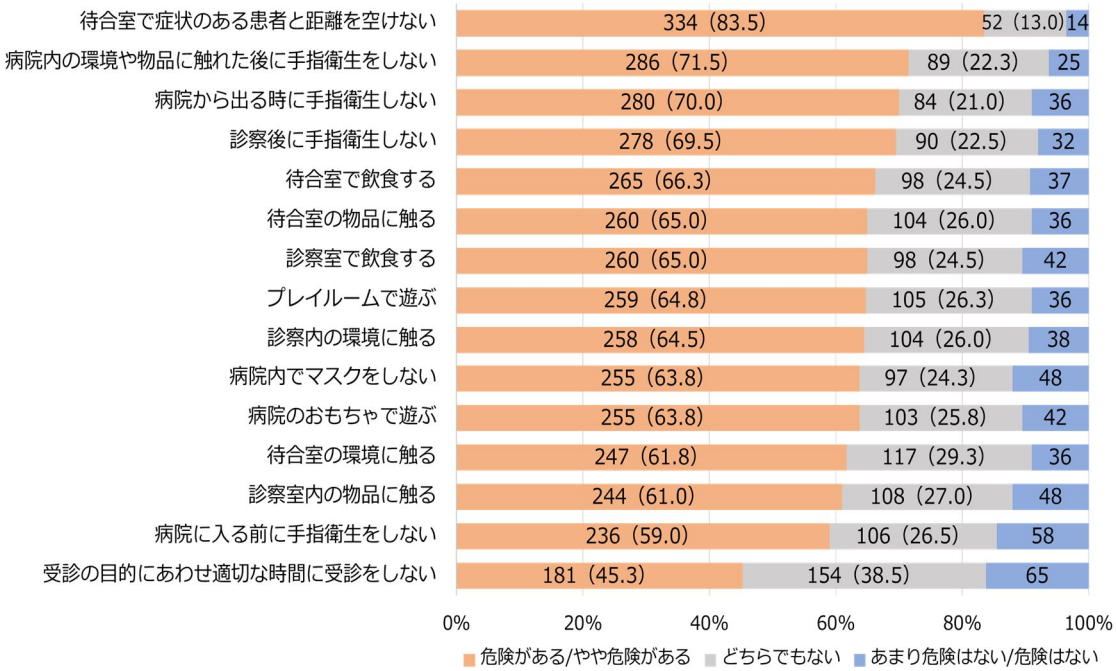

図１　小児の行動による感染の危険性の認識

（3）外来受診時の小児の行動の実際（表１）

保護者から見た外来受診時の小児の行動（小児の行動には、保護者の支援を受けて実施したものを含む）で多かったものは、「受診の目的に合わせて適切な時間に受診をした」352 名（97.5%）、「待合室で症状のある患者と距離を空けた」189 名（85.5%）であった。これらの行動は、発達段階（1 歳未満、1～3 歳、3 歳以上）による差はなく（p＝0.910、p＝0.772）、全年代で実施されていた。

「病院に入る前に手指衛生をした」 、「病院内でマスクをしていた」、「待合室の物品に触った」、「診察後に手指衛生をした」、「病院から出る時に手指衛生をした」では、発達段階別により統計学的に有意差があり、3 歳以上の小児が多く実施していた（p≤ 0.001）。これらの実施率では「診察後に手指衛生をした」、「病院から出る時に手指衛生をした」の 3 歳以上の小児の実施率が 50.3%、56.1%であり、「病院に入る前に手指衛生をした」の 84.0%に比べ低かった。

外来受診時の小児の行動において「受診の目的に合わせて適切な時間に受診をした」 、「待合室で症状のある患者と距離を空けた」は、前者は実施しないことでの感染の危険性の認識は低く、後者は高かった。今回の対象は 90%以上がクリニックを受診しており、クリニックの受診システムや感染管理により適切に行動できていたと推測された。外来受診時の小児の行動は、発達段階により統計学的な差があり、3 歳以上の小児の行動では他の年代より実施率の高い行動があったが「診察後に手指衛生をした」、「病院から出る時に手指衛生をした」はそれぞれ 96 名（50.3%）、105 名（56.1%）と実施率は低く改善の余地があると考える。

（4）保護者の感染の危険性の認識と小児の実際の行動との関連

外来受診時の小児の行動による感染の危険性の認識と小児の実際の行動について、関連のあった行動は、「病院に入る前に手指衛生をした」、「病院内でマスクをしていた」、「病院から出る時に手指衛生をした」、「診察後に手指衛生をした」、「待ち時間を病院外や自家用車内で過ごした」（p< 0.001）であり、いずれも保護者が危険性を認識している方が、小児の実施率が高かった。これら関連のある項目については、保護者の危険性の認識を高めるような介入を行うことで、小児の行動が改善される可能性が示唆された。「診察後に手指衛生をした」、「病院から出る時に手指衛生をした」は、保護者の認識と小児の行動に関連がある

表1. 発達段階別の外来受診時の小児の行動（N＝400）

	全体※1 n=400	1歳未満 n=72	1～3歳 n=122	3歳以上 n=206	*p*※2
受診の目的に合わせて適切な時間に受診をした	352（ 97.5 ）	67（ 97.1 ）	107（ 98.2 ）	178（ 97.3 ）	0.910
病院に入る前に手指衛生をした	244（ 66.1 ）	21（ 32.8 ）	65.0（ 55.6 ）	158（ 84.0 ）	<0.001
病院内でマスクをしていた	194（ 49.0 ）	11（ 15.3 ）	18（ 14.9 ）	165（ 81.3 ）	<0.001
待合室で症状のある患者と距離を空けた	189（ 85.5 ）	25（ 83.3 ）	59（ 84.3 ）	105（ 86.8 ）	0.772
待合室の環境に触った	214（ 57.7 ）	27（ 40.3 ）	73（ 62.4 ）	114（ 61.0 ）	0.006
→触った後に手指衛生をした	91（ 47.4 ）	8（ 32.0 ）	39（ 59.1 ）	44（ 43.6 ）	0.040
待合室の物品に触った	252（ 65.3 ）	31（ 44.3 ）	82（ 68.3 ）	139（ 70.9 ）	<0.001
→触った後に手指衛生をした	107（ 45.7 ）	11（ 37.9 ）	41（ 53.2 ）	55（ 43.0 ）	0.255
プレイルームで遊んだ	83（ 28.1 ）	8（ 14.5 ）	24（ 27.9 ）	51（ 33.1 ）	0.028
→遊んだ後に手指衛生をした	35（ 44.3 ）	4（ 50.0 ）	11（ 47.8 ）	20（ 41.7 ）	0.839
病院のおもちゃで遊んだ	69（ 27.1 ）	6（ 12.8 ）	18（ 25.7 ）	45（ 32.6 ）	0.024
→遊んだ後に手指衛生をした	32（ 49.2 ）	2（ 33.3 ）	9（ 56.3 ）	21（ 48.8 ）	0.690
診察内の環境に触った	112（ 29.7 ）	14（ 20.0 ）	41（ 34.5 ）	57（ 30.3 ）	0.099
→触った後に手指衛生をした	48（ 45.3 ）	5（ 35.7 ）	14（ 34.1 ）	29（ 50.9 ）	0.410
診察内の物品に触った	180（ 46.8 ）	24（ 34.3 ）	50（ 42.0 ）	106（ 54.1 ）	0.008
→触った後に手指衛生をした	79（ 46.7 ）	8（ 33.3 ）	24（ 48.0 ）	47（ 44.3 ）	0.404
診察後に手指衛生をした	161（ 42.6 ）	17（ 24.3 ）	48（ 41.0 ）	96（ 50.3 ）	0.001
病院から出る時に手指衛生をした	167（ 45.0 ）	20（ 29.0 ）	42（ 36.5 ）	105（ 56.1 ）	<0.001

※1：覚えていない、機会なしの回答を除く
※2：Fisher Exact test またはFisher-Freeman-Halton test
※3：□ 実施すると感染予防の項目

にも関わらず実施率が低いため（55.8%、51.7%）、その原因を明らかにする必要がある。「受診の目的にあわせて適切な診療時間に受診をすること」、「待合室で症状のある患者と距離を空けること」は、保護者の危険性の認識と小児の行動に関連はなかった（p＝1.000、p＝0.105）。保護者の認識に関わらず、適切な診療時間に受診をしていた。また、保護者の認識に関わらず、症状のある患者と距離を空けることができていた。これは保護者が留意しなくとも、小児科外来の受診時システム等により、目的に合わせて適切な時間に受診をすることができていたと考える。後者については、COVID-19 の感染対策により、日常生活において身体的距離の確保が求められていたことや、病院での感染対策が十分に行われていたため実施できていたと考える。

（5）小児の感染予防行動の実施状況への保護者の認識

小児の感染予防行動の実施状況について、保護者が必要と考える行動を小児に行わせることができているかとの問いに、「あまりできていない」または「できていない」と回答した保護者は、3 歳以上の小児で 53 名（25.7%）、1～3 歳の小児で 49 名（40.2%）であり、発達段階により有意な差があった（p=0.005）。小児の行動の実態でも、3 歳以上と 1～3 歳の小児を比較した際に、1～3 歳の小児の方が有意に実施できていない行動があり、保護者の認識と同様の結果であった。理由についての自由記載欄には、「イヤイヤ期で言うことを聞いてくれない」、「子どもが複数いると、目が届かない場面がある」といった記載があった。小児の成長発達段階において保護者の望むように行動させることができないことや、受診時に目が行き届かない状況があると考えられる。保護者の感染予防への認識だけでなく、小児に感染予防行動を行わせる上での促進要因と阻害要因を検討し、阻害要因に対する支援を行う必要があると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 吉川寛美、脇本寛子、矢野久子	４．巻 37（2）
２．論文標題 保育所における乳幼児のための玩具の衛生管理の実態と課題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本環境感染学会誌	６．最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吉川寛美、矢野久子
２．発表標題 小児科外来における小児の衛生行動と保護者の認識
３．学会等名 第38回日本環境感染学会学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉川寛美、矢野久子
２．発表標題 小児科外来における保護者の感染の危険性の認識と小児の行動の実態との関連
３．学会等名 第70回日本小児保健協会学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉川寛美、村端真由美、矢野久子
２．発表標題 小児科外来における小児の衛生行動と保護者の認識－1歳から就学前までの小児とその保護者に焦点をあてて－小児科外来における小児の衛生行動と保護者の認識－1歳から就学前までの小児とその保護者に焦点をあてて－
３．学会等名 第41回東海外来小児科学研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉川寛美、村端真由美、鈴美里、住田千鶴子、矢野久子
２．発表標題 小児科外来での待ち時間の過ごし方と保護者の衛生認識の検討
３．学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉川寛美、村端真由美、鈴美里、住田千鶴子、矢野久子
２．発表標題 小児外来での療養環境表面との接触状況と衛生管理に関する検討
３．学会等名 第35回日本環境感染学会学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	矢野　久子 (YANO Hisako)		
研究協力者	むらばた　まゆみ (MURABATA Mayumi)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関